

ドイツ留学記

丸山 空大

2011年9月末日、一年と少しのドイツ滞在を終えた僕を日本へと届けるはずであった飛行機は、当時日本列島を通過中だった巨大台風のために飛びたつことはなかった。経由地の北京で、空港職員や航空会社からの満足な説明も無いままノービザで三日間をすごした後、妻子の住む九州になんとか帰り着き、それまで家族にかけた迷惑を——というよりは、自分が感じていた別離による寂しさを一一埋め合わせるように家族サービスに努め、慌しく年末を迎えた今、ドイツ滞在を振り返ろうと思うのだが、なかなか記憶の糸が繋がらない。帰国前後での生活の変化に加え北京でのこの宙ぶらり体験が、ドイツ生活の記憶に薄いベールをかけてしまったようで、かの地での出来事はなんとも現実感を欠くものとして思い返されてくる。単なる義務感からではなくある種の報恩の気持ちから、つまり今回の留学に際して自分が先輩や友人から励まされ刺激を受けたように、僕もこれから留学を考えている後輩を励ますことができたらと思い、この報告記の執筆を引き受けたのだが、こうして書き始めてみると何をどう書いたらよいか。

加えて、今回の留学は一年間の史料調査を目的とする、腰掛け身分での留学であった。今の研究室の後輩を見るに、皆、特に誰に何を言われるでもなく海外へ長期、短期で渡航、留学しているようだ。こうなると彼らに対してなにか有益な情報を提供することなどそもそもできそうに無い。出来ないことは出来な

いので仕方が無い、今回はこの報告を二年前の自分のように、今現在留学を躊躇している人に向けて書こうと思う。特に今回の僕の場合、さまざまな幸運が重なったこともあり、留学を思い立ってから実現するまでの期間が比較的短かった（のではないかと思う）。留学をしようかするまいか、留学してどうなるのかなどと悩んでなかなか決断できずにいる人が、この報告を読んで留学は案外気軽にできるのかもしれないと感じてくれたならとてもうれしく思う。

先ず総括めいたことを述べるなら、今回の留学は端的に有益であった。留学を躊躇していたことが本当にばかばかしく思えるほどである。もともと渡航の目的としていた史料調査で収穫があった、あるいは参加したゼミや研究会で得るところが多かった、といった研究上のことがらから、ドイツ語や料理のスキルが上がった、友達が増えたといった実生活上のことがらにいたるまで、実際よいことづくめであったように思う。このように有意義な留学ではあったのだが、実は出発前はその意義についてあまり期待してはいなかった。むしろ、留学などしなくてもよいのではないかとすら考えていた。というのも、研究に必要な本や論文はそのほとんどを日本で読むことができる。では学位をとるのか？ 学位の取得は考えなかったわけではないのだが、家族の状況なども併せて考えたときに、留学が長期に及ぶことになる学位の取得は現実的でなかった。そうしたときに、いまさら一、二

年留学してなにになるのだろうか、という思いがあった。今にして思うと、この「いまさら」という感覚はある種の怖れに由来するものだったのかもしれない。情けない話だが、実際に、これまで自分が進めてきた研究が留学先で大きな変更を余儀なくされるのではないか、あるいは、これまでの研究がまったく的外れであることが明らかになるのではないかと、といった考えが留学前に頭をよぎることがしばしばあった。そうこうしているうちに、留学のタイミングをすでに逃してしまったような気さえしていた。

このようにすっかり内向きに内向きに考える癖が付いてしまっていた僕に、きっかけを与えてくれたのは友人たちであった。彼らは必ずしもフィールドワークや現地調査を必要とする研究をしているわけではなかったが、さも当たり前のように留学を決断していった。自らの研究分野のリーディングスカラーがいる、〇〇大学はその分野の研究で有名であるといった理由に加えて、彼らにはそもそも海外のことを研究しているのならそれだけで十分に海外に留学する理由になるというコンセンサスがあるようにみえた。うじうじしている僕を尻目に次々と留学を決断する友人たちの姿に僕は大いにあせりを感じたし、同時に次のように考えるようになっていった。つまり、メリットデメリットを量った上で留学するのかもしれないのかを決めるのではなく、自分もそもそも留学するものなのだ、何があるかは分からないけれど、むしろ何があるか分からないからこそ、とにかく僕も留学したほうがよいのだろう、と。こうして、僕は留学することを決めた。

さて、決めるには決めたが、まったく手がかりが無い。どうしたものかと鶴岡先生に相談したところ、ドイツ留学経験のある研究室の先輩を紹介してくださった。お話を聞き、

さまざまな奨学金の情報を教えていただいたのだが、そこでわかったのは何はともあれ留学先を決めなくてはならないということだった。当たり前の話だが、どこの大学にどの教授の受け入れで留学するのが決まらなければ話は始まらない。これが留学前の最大の難題だった。これについてもまったく当てがなかったで、それまで研究文献を通して名前を知っていたドイツの先生方に手当たりしだいメールをしてみた。幸い何人かの教授が親切な返事を下さった。しかし、実際に受け入れてもらえるのかといった問題になると、メールをやり取りしていてもなかなか埒が明かない。そこで、直接彼らを訪ねてみることにした8月の末のことだったと思う。ドイツ学術交流会(DAAD)の奨学金申請の締め切りは9月末だったのでこの年の申請は難しいと思っていたが、とにかく、9月の中旬にドイツを訪問することに決め、アポイントメントをとった。もしもの場合に備えて、申請に必要な書類は準備しておいた。

さて、ドイツ訪問である。初めて訪れたドイツは暗く、雨だった。せめて天気くらいは味方してくれればよいのに、と憂鬱な気持ちになりながら、重い荷物を抱えてユースホテルへと続く長い坂を登っていったのを憶えている。こうして始まった受け入れ教授探しの小旅行であったが、三人の教授を訪ね、幸いにも受入れ教授を見つけることができた。定年間近、大学図書館が貧弱などの理由で受入れてくれなかった教授たちもとても親切で、僕の拙いドイツ語を親身に聞いてくれ、奨学金申請のために推薦状を書いてくれた。僕はこれを非常に幸運と感じたのだが、その教授の一人によれば「日本から自分の本を読んだらといって学生が来たら誰だってやさしくしたくなるさ」とのことなのでそんなものなのかもしれない。また、学位の取得を目的とし

ない、奨学金付きの留学生は教授側にかかる責任や負担も比較的少ないので推薦や受入れ許諾を取りやすかったという事情もあったのだろう。ともかく、この一週間の旅行で留学先と受入れ教授が決定した。そして、帰国直後書類を取りまとめて申請し、面接を経て冬には奨学生に内定することになる。留学は翌年の8月からだった。

あまり繰り返すとどうにも胡散臭くなるようにいやだが、この留学は結果的にとても有意義なものであった。このため、留学先や受入れ教授をこのように行き当たりばったりな仕方決めてしまったことに関して、自ら是非を論じることはできないのだが、今になって振り返るときに反省すべき点は多くあるように感じられる。事前にもっとさまざまな研究者と連絡を取り、研究計画をつめてから留学すべきではなかったのか、留学先は最善の選択だったのか、1年という留学期間の設定は妥当であったのか。そして、このような反省にいつも付きまとうのが、この留学で僕が得た研究上の収穫はほとんどが偶然の幸運の所産だったのではないのかという疑念だ。この疑念を僕は留学中からすでにおぼろげながら抱いていた。結果的に僕にとって有意義であったのだから、それが幸運によるものであろうが偶然によるものであろうが僕にとってはどうでもよいのかもしれないが、それをそのまま報告してしまうのでは、本報告を始めるにあたり自ら設定した目的に対してやや無責任なように思われる。

すこし具体的に述べよう。僕は、フランツ・ローゼンツヴァイクという二十世紀初頭を生きたドイツのユダヤ人思想家について研究している。今回の渡航の主目的は、ドイツ国内のいくつかの史料館にある未公刊史料の調査と収集であった。この目的は早々に達成することができたのだが、同時に肉筆による手

稿史料の扱いの難しさという問題に行き当たった。彼の筆跡の判読は容易ではなく（不可能ではなく、時間をかければその多くを判読できるところがまた悩ましいのだが）、書簡など時間をかけて判読したその内容が他愛の無い私信であるということもしばしばであった。このような史料状況を確認できたこと自体は大きな収穫であったのだが、史料自体はといえばかかわり方によってはこちらが泥沼に引きずり込まれかねない危険なものだった。

他方で、帰国後の博士論文執筆という目標にむけてより即効性のある意義をもったのは、たとえば留学先のボーフム大学でたまたま開講されていた十九世紀ドイツにおけるユダヤ教の諸相をテーマとしたゼミであったり、講演会でたまたまボーフム大学を訪れていたヘブライ大学の教授との面談とこの出会いをきっかけとしたイスラエルへの訪問であった。また、ボーフム大学の宗教学研究センターが国際性を志向していることは知っていたが、これほど頻繁に国際的な研究会や講演会を開催していることは留学先を決定した時点では知らなかったし、大学図書館は蔵書量、サービスともに予想以上に充実していた。どれもこの時期にこの大学にいたからこそ得ることのできた収穫であったといえるし、このような意味で全て偶然と言えれば偶然といえなくもないのである。

しかしながら、これら全ては確かに偶然にはちがいないのだが、ドイツに、つまり研究の中心地に近づけば近づくほどこのような幸運な偶然が起こる確率は上がってくるのではなからうか。この意味で、このような偶然が重なったことはあながち偶然とはいえないと思う。また、仮にこれらの偶然が全てなかったとしても、研究上有意義な成果をあげることはできたのではないかとも思う。というのもドイツでは様々な研究者を訪ね、これまで

の自分の研究を説明し、それについての助言や批判を仰ぐことができた。そうした面談で彼らは、僕の問題関心、テーマ設定に隣接する問題を示唆し、それについての参考文献を指示した上で、その分野の研究者を紹介してくれた。おかげで、さまざまに絡みあう問題の広がりの中での自分の研究の位置づけが非常にはっきりしたし、人から人へと人的な交流を広げることができた。ドイツの教授陣は毎週一定の時間を学生のための面会時間として割いていたし、その時間外でも面会を申し込めば基本的に快く応じてくれた。こういった人的資産は不変であり、運不運に依ることなく常に利用することができる。このような機会を利用することで、じっくり論文を書き批判を仰ぐことも可能だったろう。

今こうして振り返ってみると、目の前に与えられた幸運な偶然に飛びつくあまり、腰を据えてじっくりと考えを練るということが少なかったかもしれない。しかしこれをするには、時間が足りなかったとも思う。実際、留学中は限られた時間をどのように使うのかが一番大きな問題となった。留学前にはこのように悩むことになるとは全く考えていなかった。一年の留学は短いと多くの人に言われて

いたのだが、実際その意味もよく理解していなかったのだ。時間の使い方には様々な可能性があり、その中で元来怠け者の僕が正しい選択をできたのかは非常に心許ない。ともかく乱暴に総括するなら、日本にいては手にいれることができない収穫はたくさんあったのだが、その収穫を最大化していたかについては反省すべき点がある。しかし、ともかくも収穫はあるのであり、留学中に留学前にはまったく期待していなかった展開が開ける可能性も大いにある、とすることができると思う。また、留学期間に関しては、僕は結果的に短かったと感じたが、このような感想自体留学することによって初めて得ることができた。必要であればまた改めて留学すれば良いのである。

というわけでこの報告の結論としては、研究のどのような段階にあっても、また、どのような期間であっても研究の中心地に近づいていくことは端的に有益であり、だから、留学のタイミングや期間についてはさほど思い煩う必要はないのではない、としたい。留学は思い立ったときがタイミング。是非、気軽に奨学金など応募して渡航してみたらよいのではないだろうか。